

猫の歴史

上巻

# 猫の歴史

(附)

犬公坊「綱吉」

上原虎重著



創元社

猫の歴史

昭和二十九年一月十五日初版発行  
昭和二十九年四月二十日再版発行

定価 三〇〇円  
地方売価 三一〇円

著者 上原虎重

大阪市北區樋上町四五

發行者 矢部良策

大阪市西淀川区柏里町三ノ一二九

印刷者 井下精一郎

發行所

大阪市北區樋上町四五番地  
東京都中央區日本橋小舟町

創元社

振替・大阪五七〇九九・東京一五六五

## 序

私と上原虎重とは、妙義山を眞ん中にして、西と東に生れた。上原の生れた村は、いま基地問題でやかましい山の中で、人より猿の人口が多いようなところだった。私とその村を妙義の裏山という、負け嫌いの彼は、あべこべに私の生れた町を、裏山だと言ひ返した。山の裏表は要するに水掛論で、ついに彼の死に至るまで結着がつかなかった。ただに妙義山のみではなく、私と彼とは世界観や物の見方まで、萬事が山の裏表だった。顔を合せると、すぐ果てしのない言い合いになった。こんな仲の悪い友達は、そんなにあろうとも思われないのに、人間的に相許すところがあつたとみえ、こんなにしみじみとつきあえる友達もなかった。

戦争が始まると、私は戦争反対側で、郷里の、彼のいわゆる裏山に引っこんでしまった。時折、上京する毎に、田舎酒を二三升、リュックに押しこんで運んでいった。酒が不自由だった時代で、酒は彼には飯より好物だった。私の顔を見ると、友達は有難いものだなアと、そういつて眼に涙をたたえた。上原は一生を強情で通したようなものだが、心の底にはそういう弱い、やさしいところがあつた男である。

戦争がすむと、立場は裏表になり、私が裏山から東京に出てくると、彼はパージにかかって、大阪に蟄居しなければならなくなった。だからといって、ヘコタレルような彼ではなかった。あの不自由な時代に、あの不自由な足で、あの不自由な獨身生活をしながら、幾つかの立派な仕事をなしてきていた。しかし私はこの序文を求められるまで、彼の死後に猫の研究を残したことを知らなかった。

私の愛猫趣味はいつ始まったかわからないが、戦後偶然、捨て猫を十頭ほど飼いならすようになり、世間から愛猫家の一人に数えられ最近猫に関する二三の雑文を雑誌などに發表して、自らも愛猫家をもって任ずるようになった。しかし本書をみるに及び、彼の猫愛は、その深さと廣さにおいて私などその足下にも及ばないことを知り、改めて上原なる人間を、見直したことであった。

事ごとに意見を異にした私が、猫愛において彼と一致を見出した時、すでに彼はこの世の人ではなかった。もし彼が生きているなら、すくなくも猫に關しては、山の裏表ではなく、同じ側に立つて、なごやかに話し合うことができただろうに、まことに残念至極である。これを以て序に代える。

昭和二十八年十二月十四日

東京荻窪の寓居にて

阿 部 眞 之 助

## はしき

われわれのペット猫の歴史といふものがあるかないか、私は寡聞にして知らない。もしないならば、誰かによつて書かれねばならないものであらう。たゞ犬や猫がすぎだといふだけのことで、動物學者でも猫の研究者といふでもない私が、それを試みたのは妙な話だが、本文に書いた通り、ふとした機會から猫に特別の興味をもつやうになつて若干の材料を集めて來たのと、ひまなからだになつたからである。もとよりこの小研究は不完全なものではあるけれども、將來日本の家猫の歴史を書く人のためには多少の参考になるであらう。

ついでにネコの語原についても一考した。これも私が知つてゐるかぎりでは、いまだに定説がないからである。相當の確信をもつて書いておいたから、將來の辭典編纂者には参考になることと思ふ。

犬公方徳川綱吉論といふものも世にあるのかないか知らないが、怪奇を極めたこの人物の性行が大して解剖されたやうにも見えない。しかし彼にはたしかに私などより適當な人のメスを煩はず

だけの値打があるのである。私はこの變質的タイラントに長い間興味をもつてゐたので、この機會に一應まとめて、犬のゆかりによつて猫の分とくみ合はした次第である。

終りに、この小冊子を世に出すについていろいろの意味で私を援助してくれた新聞社の舊同人諸君に厚くお禮を申述べます。

昭和廿八年十一月

上 原 虎 重

# 目次

序……………阿部眞之助

\*

はしがき

猫の歴史

日本の家猫(後半史)……………三

日本の家猫(前半史)……………三

漢民族と猫……………三

インド猫の東漸……………三

山猫……………三

山猫の獐猛性……………三

ネコの語原……………三

猫の語原……………三



キャットの語原……………	八九
魔物としての猫……………	一〇一
佐賀の夜櫻怪猫傳とその渡英……………	一二三
西洋の猫の傳説……………	一三三
「犬公方」綱吉	
綱吉の血統……………	一三九
源實朝と徳川綱吉……………	一五三
綱吉の性向……………	一六〇
生類憐愍政策(上)……………	一七三
生類憐愍政策(下)……………	一八三
綱吉と柳澤吉保……………	一九六
吉保の權勢と腐敗……………	二〇八
綱吉・吉保に關する「實録」……………	二一六
吉保は嬖臣の典型……………	二二九

悲劇……………三六

綱吉の死因について……………三四

綱吉の死後……………三三

### 附 録

赤の傳……………二九

チビの傳……………二六

\*

後記……………加藤三之雄

猫  
の  
歴  
史



## 日本の家猫（後半史）

犬と猫、私どものやうな専門家でないものは、いろ／＼の意味で私どもの日常生活に貢献するこの二獣について考へるといふことは滅多にない。なれきつてゐるせゐであらう。ところが何かのはずみで考へ出すと、常に私どもと共にゐるこの二獣について分つてゐないことがあまりに多いのに驚かされる。第一にその身元であるが、兩方ともほとんど不明であると云つてよいのである。犬の方はその歴史が古すぎるので調べやうがないのも無理はないが、猫の歴史は犬とはくらべものにならぬほど新しいのに向にはつきりしてゐない、それが日本だけのことでないのであるから實に不思議である。一體猫といふ生きものはいつ頃から人間との共同生活に入つたのであるか。又わが國にはいつ頃から家猫といふものがゐるのであるか。

シャム猫とかベルシャ猫とかが近頃日本へ輸入されたものであることは誰でも知つてゐるが、普通の家猫がいつからこの國にゐたかといふやうなことを考へる人は少ないであらう。私も實はその一人であつた。たゞ彼等は犬とともにわれ／＼と一緒に暮してゐるものといふだけで満足してゐた

のである。ところがある時、松平静氏の「枕草紙詳解」を讀んで急に家猫の起原に好奇心をもつやうになつた。同書は近世における國學の泰斗黒川眞頼翁の説としてかういふ説明を載せてゐたのである。「當時の猫は支那より渡來して未だ間もたぬほどなれば、高貴の家にあらざれば飼ふことあらざりしなり。ことに一條帝は猫を好ませ給ひしよしものに見えたり。本邦の生來の猫は山猫といへるものにて、性猛くして人に馴るゝものにあらず」(翁丸の段)といふのである。猫は輸入されたものとも、日本の山猫がならされたものとも考へたことのない私ではあつたが、輸入されてから一條天皇の御代までにまだいくらかも經つてゐなかつたとはつきり書いてあるのを見ては變に感ぜざるを得なかつた。犬猫と併稱されるにしては、猫の歴史があまりにも新しいのに驚いたのである。

それならば、正確にいつて家猫はいつこの國に輸入されたのであるか。そのやうに短い歴史しかもたない家畜のことならばもうちゃんとその年代が記録に載つてゐることだらうと思つて、あれこれと書いたものを見たが、正確にその質問に答へてゐるのはなかつた。言海には「ねこはねこまの下略、寢高麗の義などにて韓國渡來のものか云云」とあつて、質問に答へるところか、あべこべに質問を出してゐた。平凡社の百科辭典には「猫が我が國に輸入されたのは奈良朝時代の少し前で、朝鮮から輸入され、古くはネコマと呼ばれてゐた」といふ説明が與へられてゐた。渡來してから一條天皇の御代にまだ間がなかつたといふ黒川翁の説とは大分違ふが、いつといふ年代は書いてなかつた。動物辭典の類も若干のぞいて見たが、渡來時期を記したのには出會はなかつた。古いところ

では源順も「本邦古來宮中多愛之」と云つて、一番大切なところが「古來」といふ捉へどころのない語になつてゐた。私は意外に思つた。どの民族でも石器時代からもつてゐた犬のやうな家畜ならばいざ知らず、猫のごとき最近のもの年代が一向にはつきりしてゐないとは一體どうしたことであらうか。

それから私はいろいろのものを讀みながら、他の事同様に猫に關する記述をノートした。何かの手がかりに行き當るかと思つたからである。少しは特に調べたりもした。しかし私のノートは一條天皇から百年以上には溯れなかつた。それでもめげずにノートを取りつゞけた。溯れない分を推測する材料になるかも知れないと考へたからである。そのやうにしてわかつたものを年代順にならべて見る。そして溯れなかつた分についての問題はあとのことにする。第一番は宇多天皇の御記に見える黒猫の記で、これが私が見たかぎりにおいては日本の家猫に關する最古の文献である。斷つておくが、私はつぎに列擧するものに一々自分の考へなど書き添へる。あとから綜合的に家猫を考へるための豫備行爲と思つてもらひたい。一種の筆のすさびなのだから少しは餘計なことも書くであらう。

宇多天皇御記

六日(寛平元年二月)、朕閑時述<sub>二</sub>猫消息<sub>一</sub>曰、駟猫一隻、太宰少貳源精、秩滿來朝所<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>於先帝<sub>一</sub>、

愛<sub>二</sub>其毛之不<sub>レ</sub>類云云。皆淺黑色也。此獨深黑如<sub>レ</sub>墨。爲<sub>二</sub>其形容<sub>二</sub>惡似<sub>二</sub>韓盧、長尺有五寸高六寸計。其屈也小如<sub>二</sub>米粒、其伸也長如<sub>レ</sub>張弓。眼晶晶燦如<sub>二</sub>針芒之亂、眩鋒直豎如<sub>二</sub>起上之不<sub>レ</sub>搖。其伏臥時團圓不<sub>レ</sub>見尾、宛如<sub>二</sub>珮中之玄璧。其行步時寂寞不<sub>レ</sub>聞音聲、恰如<sub>二</sub>雲上之黑龍。性好道行（引？）暗合<sub>二</sub>五禽、常低<sub>レ</sub>頭尾著<sub>レ</sub>地、而聳<sub>レ</sub>背脊高二尺計、毛色恍（呪？）澤蓋由<sub>レ</sub>是乎。亦能捕<sub>二</sub>夜鼠、挺<sub>二</sub>於他猫。先帝愛翫數日之後、賜<sub>二</sub>之于朕。朕撫養五年于今、每且給<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>乳粥。豈啻取<sub>二</sub>材能翹挺、因<sub>二</sub>先帝所<sub>レ</sub>賜、雖<sub>二</sub>微物<sub>二</sub>殊有<sub>レ</sub>情<sub>二</sub>於懷育<sub>二</sub>耳。仍曰、汝含<sub>二</sub>陰陽之氣<sub>二</sub>備<sub>二</sub>支骸之形、心有<sub>二</sub>心寧知<sub>レ</sub>我乎。猫乃歎息、舉<sub>レ</sub>首仰<sub>二</sub>睨吾顏。似<sub>二</sub>咽<sub>レ</sub>心盈<sub>レ</sub>臆、口不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>言。

五十三歳で即位遊ばされた光孝天皇は、それ以前源時康と名乗つてをられた時分男女廿九人の御子達があつたが、その中第七男の宇多天皇（當時源定省<sup>さだみ</sup>）を最も愛してをられた。定省を皇太子に立てられた時にも「第七息ノ定省ハ年廿一、朕ガ躬ヲ扶持シテ未ダ曾テ閑ヲ出デズ、寛仁孝悌、朕ノ鐘愛スルトコロナリ」（三代實錄）と仰せられて、源姓を削つて親王に列せられたのであつた。御記によれば、宇多天皇が件の黒猫を飼つてをられたのは寛平元年二月で五年といふのであるから、元慶五年か仁和元年に飼ひはじめられたわけで、父皇も猫はお好きであつたらしいが、御即位早々のことだつたので猫などにかゝり合つてをられないところから、當時十八九歳の青年で朝夕天皇に奉仕してをられた最愛の御子に賜ふたのである。われ／＼の言葉でいへば、「この猫は珍しいものなんだが、俺は忙しくて面倒が見られないからお前が代つて大切に飼ひなさい」といふやうなこと



を仰せられたであらうことは御記の文面から見てとれるのである。

そこで猫自體であるが、天皇はお筆のすさびでいろ／＼と説明してをられるけれども、毛の色が眞つ黒であるといふ以外、特に他の猫と違つてゐると思はれる點はない。猫が歩くとき寂寞としてゐることは普通のはなしだし、鼠を捕るのが他よりも上手だといつたところで、單に比較的高手といふまでのことである。しかしポイントはその眞つ黒といふことで、それが大切なのである。皇室の御親類であつた少壯官吏源朝臣精が任期が満ちて九州から京都へ歸るに當つて、光孝天皇へのお土産にこの猫をわざ／＼持つて行つたのはそのためだつたのである。當時もさういふ毛色は珍重がられたが、今のわれ／＼にとつても日本の家猫を考へる上に、その點は重要な示唆になるのである。簡単に考へれば、虎の親類に當る猫の着物は元來虎斑とらふまにきまつてゐると云ひたいところであるが、猫の毛色なるものはさう單純にいつて退けらるべきものでない。あとから分ることであるが、黒猫といふやうなものは温帯の山猫には關係がないのである。しかるに御記には「皆淺黒色也」といふ一句があつて、當時京都にそのやうな猫が澤山にあつたことを示してゐるのである。たゞこゝに一つ困ることは、今引いた一句と「愛<sup>ニ</sup>其毛之不<sup>レ</sup>類」との間が「云云」となつてゐて、前後がうまく連絡しないことである。私は御記を續々群書類從から引いたが、同書には「云云」となつてゐるのである。天皇御自身さう書かれたとは思へない。恐らく後人のしわざであらうが餘計なことをしたものである。そのためにどうして猫が皆淺黒色なのか全然不明になつてしまつた。